

小学校における歯肉炎を改善するための
歯科保健教育の実践

○松岡奈保子*、藤好未陶**

*NPO 法人ウェルビーイング

**福岡歯科大学口腔保健学講座

【目的】小学校高学年になると多くの児童に歯肉炎がみられるようになる。歯肉炎を改善するためには、歯頸部のプラークを除去する歯磨きを実行することが必要である。またその歯磨き行動を継続することで歯肉炎を予防することができる。この歯磨きの技術を習得することで、一生涯健康な歯肉を維持することができると考えられる。演者らは「歯肉炎」をターゲットとした健康教育を実施し、良好な結果を得たので報告する。実施したアンケートの結果から歯磨き行動の継続についても知見が得られたので報告する。

【対象と方法】福岡県下M小学校5年生74名に歯肉炎の改善と予防のために必要な知識を得ることができ、有効なブラッシング方法を身に付けることのできる歯科保健教育プログラムを実施した。内容は第1回目：自分の歯と歯ぐきに興味を持ち歯肉炎を見分けることができるようになる。2回目：歯肉炎に効果的な歯磨き方法を知り、そのための歯磨きができるようになる。3回目：その歯磨きの継続を図るを目的として開発した。教室の前後にはMIDORIモデルをもとに作成した自記式質問紙調査を行い児童の知識、態度、自信、技術など行動を把握した。歯垢の付着状況は前歯部のPHPを用いて確認し、歯肉炎について前歯部のPMAを用いて評価した。

【結果】教室前後で歯肉炎の原因は歯垢である35%→90%。歯磨きで歯肉炎は防げる48%→80%。元気な歯ぐきと病気の歯ぐきの違いがわかる36%→79%に増加した。歯垢の付着状況も改善した。歯肉炎が改善した児童は77%。変化なし11%。歯肉炎が増加した児童11%。プログラム実施半年後の歯肉炎は教室直後ではPMA1or2の児童が最大値40名であったが半年後はPMA0の児童が最大値24名でさらに歯肉炎が改善されていた。

食事療法が思春期の軟骨内骨化に与える影響

○西田郁子、木村光孝

九州歯科大学口腔機能発達学分野

【目的】第2次性徴期は生涯で骨量増加量が最大になる時期である。本研究では、ヒトの思春期にあたる生後8週齢のラットを用い、カルシウム摂取量とIF（イプリフラボン）が成長発育期の軟骨内骨化に与える影響に関して、光顕的、超微形態的および微細構造学的検索を行った。

【方法】生後8週齢のWistar系雄ラットを用い、①対照群、②カルシウム欠乏食群、③カルシウム欠乏食+標準食群、④カルシウム欠乏食+高カルシウム食群、⑤カルシウム欠乏食+高カルシウム食・IF添加標準食群の5群に分けて飼育する。4週間飼育後、下顎頭を摘出した。光顕的、超微形態的、微細構造学的観察を行った。

【結果】高カルシウム食と同時にIFを摂取すると、光顕的所見では、骨虚弱状態に陥っても、石灰化基質の増加とそれを侵食する軟骨吸収細胞の増加、骨基質における骨芽細胞の増加がみられ、軟骨組織から骨組織への置換促進が顕著であった。超微形態学的所見では、骨吸収所見より骨基質形成所見が広範囲にみられ、骨代謝回転は促進されていた。微細構造学的所見では、活性化を呈する骨芽細胞の増加がみられた。破骨細胞は、ruffled borderが扁平化し、骨基質より遊離し、骨吸収を抑制していた。骨細胞は、大型の核を有し、成熟タイプの細胞が増加していた。

【考察】第二次性徴期に骨虚弱状態に陥っても、IFをカルシウムと同時に摂取することにより、下顎頭軟骨層の成長促進、軟骨基質の石灰化促進に引き続き、骨吸収抑制および骨形成促進が行われ、対照群と同程度までに回復することが、光顕的、超微形態的および微細構造学的に明らかとなった。